

「鼻」におけるベルクソン哲学の陰影

高橋 龍 夫

はじめに

芥川龍之介の「鼻」〔新思潮〕大正5・2の論考は、既に膨大なものに達している。その多くは、出典との比較、主人公内供の自意識の悲喜劇の意味づけ、語り手のレベルでの構造分析、そして草稿による創作過程の検討などに光が当てられてきた。その中で明瞭になってきたのは、「鼻」の創作過程において、語り手のレベルでの〈笑い〉と〈晒い〉との意識的な使い分けである。この差異は、「鼻」の解釈、及び芥川の創作意識を探るファクターとして扱われてきているが、その背後にアンリ・ベルクソンの『笑い』〔Le Rire〕1900が関与していることを考慮する論者はほとんどない。その中で唯一、同書との関連を指摘している石割透氏の推論は炯眼と言うべきだが、「鼻」に用いられる〈笑い〉の要素との関連性を検討する段階にとどめられている。「鼻」と『笑い』との関連については、筆者も既に考察の一部を拙稿にて指摘したが、未だ『笑い』を基点としたベルクソン哲学との相関をめぐる詳細な検討が重要

な課題として残されている。結論から言えば、「鼻」によるベルクソン受容は、単なる一作品の創作上のヒントにとどまることなく、その哲学的実践が芥川文学を新たに照射する一契機を内包していると思われることができるのである。

本稿では、「鼻」を評価した夏目漱石がベルクソン哲学に強い関心を抱いていたことも考慮しつつ、「鼻」による芥川の芸術的出発の意味を改めて問い直し、芥川文学の創作意識と方法を再検討する新たな視座を提起してみたい。

1

芥川がベルクソンの『笑い』を読んだことは、親友の井川（後恒藤）恭宛の書簡の文面から知ることができる。

此間ベルクソンの「笑」をよんだ 理屈が割合にやさしく つたのでよくわかつた よくわかつたから面白かつた 面倒くさいな かくよりあつて話しをした方が遙に埒があく 僕は君に話す事が沢山ある一日しやべつてゐてもつきない

右の書簡は大正三年十二月二日付のものである。したがって「鼻」の本格的な執筆（大正四年末～五年初）に先駆けて『笑い』は読まれていた。この大正三年には既に広瀬哲士訳『笑の研究』（慶応義塾出版局、大3・4）が出版されており、また松岡譲によって第三次「新思潮」第四号（大3・5）に「芸術の目的」と題して『笑い』の一部が翻訳されている。しかし、芥川が欧米の知識の大半を英訳書に依っていたことや、書簡で「笑」と記していることから、芥川は和訳書ではなくやはり英訳書を読んでいた可能性が高い。ちなみに、同時期の英訳書として『Cloudesly Breton 訳 LAUGHTERAN ESSAY ON THE MEANING OF THE COMIC』（Macmillan, 1911）の現存が確認できる⁽⁵⁾。

なお、芥川は『笑い』以外にもベルクソンの著作を、少なくとも、『時間と自由意志』『形而上学入門』及び『創造的進化』の三点は読んでいたことが芥川の文章や書簡などから確認できる。しかし現存するのは『時間と自由意志』と『形而上学入門』の二点だけで、いずれも日本近代文学館の芥川龍之介文庫に『Time and free will』（Allen, 1912）と『An introduction to metaphysics』（Macmillan, 1912）として所蔵されている。ちなみに、芥川の書簡にベルクソンの名が散見されるのは、先のもを含めて三通（大2・12・3、大3・12・3、同12・21）あるが、いずれも井川（恒藤）恭宛である。周知のように、芥川は後に「恒藤恭氏」（大11・10「改造」）の中で次のように書き

残している。

一高にゐた時分は、飯を食ふにも、散歩をするにも、のべつ幕なしに議論したり。しかも議論問題となるものは純粹思惟とか、西田幾多郎とか、自由意志とか、ベルクソンとか、むずかしい事ばかりに限りしを記憶す（傍点、筆者。）

芥川が学生時代を送っていた大正初期は、明治末期から流行し始めたベルクソン哲学が日本で「生の哲学」として大正生命主義に至る一思潮を形成していた時期に当たる。大杉栄をはじめ、金子筑水、片上伸などが生命の進化と芸術・哲学との結びつきについて論じていた時期と相前後して、「鼻」は夏目漱石を第一の読者に想定しつつ書き上げられているのである。

特に、「鼻」を第四次「新思潮」創刊号（大5・2）に掲載した直後に、芥川はベルクソン哲学の核をなす「直観」と「持続」の原理を論じた『Time and free will』を読了し、随所にアナーラインを入れつつ、奥付に次のような感想を銘記しているのは注目に値する。

哲学の本でこんな美しい本は読んだ事がない。綺麗な水を一層つつ深く沈んで行くやうな気がして、さうしていくら沈んで行つても明るさはちつとも変わらない気がした。僭越だが序文と結論とをこの本を読まない常からボンヤリ僕も考へていたが、その間の精巧な連鎖に至つては感服の外はない。千九百一十六年三月 大学の図書館にて

本書と芥川文学との関連については稿を改めて論じるが、ここでは「僭越だが序文と結論とをこの本を読まない常からボンヤリ僕も考へていた」と書き記しているように、芥川は「鼻」によって作家としてデビューする前後からベルクソンの主著にも触れ、その主張に共鳴する素養を多少なりとも持ち得ていた点には留意しておきたい。

2

次に、「鼻」におけるベルクソンの『笑い』の影響が指摘できる箇所を確認しておく。

冒頭で触れたように、周囲の者の〈笑い〉と内供の〈晒い〉との表記を含めた笑いの扱い方に語り手は意識的であった。既に芹澤光興氏が指摘しているように、鼻を短くするエピソードまでの前半には〈晒い〉の表記は全くなく、鼻を短くした後半でも、池の尾の者たちの笑いの描写には嘲笑のニュアンスはない。彼らの〈笑い〉は「可笑しさうな」「可笑しさ」「ふっと吹き出してしまつた」「くすくす笑ひ出した」などと表記され、表情としぐさを中心とした〈笑い〉に終始しているように語られる。にもかかわらず、内供の内面では「——前にはあのやうにつけつけとは晒はなんだて。」と受け取られ、嘲笑の意味を伴った〈晒い〉と表記される。この表記は、例えば内供の内面に沿って焦点化された次の語りの箇所でも同様に用いられる。

内供は始、之を自分の顔がはりがしたせゐだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないやうである。——勿論、中童子や下法師が晒ふ原因は、そこにあるのにちがひない。けれども同じ晒ふにしても、鼻の長かつた昔とは、晒ふのにどことなく容子がちがふ。(傍点、筆者。)

内供と他者との笑いをめぐる表記とその内実の差異については、松沢和宏氏が既に指摘しているように、周囲の者の〈笑い〉を内供が嘲笑としての〈晒い〉と解釈するように設定する過程が、草稿による推敲段階で次第に明瞭化されるようになる。したがって、執筆過程において作者自身が〈笑い〉と〈晒い〉との差異、つまりは笑い手と笑われる本人との認識の差異について多分に意識的であつたことがうかがわれる。

ここでベルクソンの『笑い』を参照すると、滑稽と受け取れる人物に対しての他者の目と笑われる本人との認識の差異が、〈笑い〉の特質として上げられている点が注目される。ベルクソンは、他者から笑われるべき具体的要素として、精神的な「放心」や身体的「こわばり」を上げ、それらを喜劇の人物に見立てて次のように分析する。

喜劇の人物は概して彼が自ら己を知らずにいる程度に正比例して滑稽であるということを描するだけで十分だ。滑稽人物は無意識である。あたかもギグスの指輪を逆に使つたかのように、彼はみんなに自分を見えるようにして、自

分には自分を見えなくするのである。(中略) 笑うべき欠点はそれが笑うべき者と自分に感づくや否や、少なくとも人前でなりとも自分を修正しようと努める。(第一章——)

鼻を短くした時点での内供は、期待に反してそれまで以上に周囲から笑われてしまい、その理由を逡巡せざるを得ない状況に追い込まれていた。語り手はそのような内供を「遺憾ながらこの間に答を与える明が欠けてゐた」と説明している。ちなみに「鼻」の草稿にも、内供について「自身の顔が如何に滑稽に見えるかと云ふ事実を、商量する暇に乏しかつた」(草稿4—2、8)¹⁰という記述がみられ、ベルクソンのいう「滑稽人物は無意識である」という状況にちょうど対応している。しかも笑われるにつれて短くなった鼻を「かえつて恨めしく」思う内供の心境は、「笑うべき欠点」を「修正しようと努める」というベルクソンの指摘になぞられてくる。

また『笑い』では、笑う者はその人物の内部を対象とするのではなく、外部に見られる「こわばり」を笑うのであり、その〈笑い〉は「屈辱を与えて、縮みあがらせることを役目としてゐる」という。これを内供に置き換えてみれば、鼻という外部を短くしたが、充足すべき内面を無視された形で周囲からかえつて笑われ、それを〈晒い〉として意識し苛立たずにはいられない心境に追い込まれていく事態と一致する。

さらに『笑い』において、次に引用するように、笑い手による〈笑い〉の中に無意識の「底意」が潜むとするベルクソンの再三の指摘にも注目しておきたい。例えば次のような箇所が上

げられる。

笑いは現実のあるいは仮想の他の笑い手たちとの或合意の、殆ど共犯とでも言いたいのもの、底意を潜めている。

(第一章——)

そこ(笑い||筆者注)には、我々自身が持つていないときにも、我々に対して社会のもつてゐる一つの底意が混ざつてゐる。そこには口に出して言わぬが、面目を失わせてやろうという意向、またそれによつてもちろんのことだが少なくとも外面的になりと矯正してやろうという意向が入つてゐる。(第三章——)(傍点、筆者。)

笑いに「底意」が潜むという指摘は、「鼻」の語り手が読者に解説する「傍観者の利己主義」を容易に彷彿させる。「傍観者の利己主義」は、語り手によつて次のように説明されていた。

少し誇張して云へば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れてみたいやうな気にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に対して抱くやうな事になる。(傍点、筆者。)

「傍観者の利己主義」の内実は他者に潜む「或敵意」なのだ。これはベルクソンの指摘する「底意」そのものではないだろうか(前出の広瀬哲士訳「笑の研究」では「奥意」と訳出している)。先に上げた英訳書においては「底意」に関する箇所

を「laughter always implies a kind of secret freemasonry or even

complicity」及び「It always implies a secret or unconscious intent」

と英訳している。したがって、林達夫訳の「底意」に当たる箇所は、いわば、笑われる当人に向けられた笑い手たちの半無意識的に悪意を含んだ共犯意識とでもいうべきものであり、やはり内容として「傍観者の利己主義」に近似する。ちなみに『笑い』の結末箇所では、笑い手に「自己主義の少量」が見出されると明記されており、先の英訳書では「a degree of egotism」と表記されている。このことから、芥川は内供を取り巻く池の尾の者たちの笑う態度を、ベルクソンのいう〈笑い〉に潜むエゴイズムとしての「底意」を流用して、「傍観者の利己主義」と定義付けしてみせたのではないか。

なお、『笑い』において、肉体のこわばりや歪みが社会の懸念の種になると指摘する箇所で、ベルクソンは「鼻の曲がり具合」や「鼻の大きさ」をその具体例としてあげている。また、その他数箇所でも「鼻」を〈笑い〉における典型的事例として例示し〈笑い〉の特質を説明しようとしている。『今昔物語集』の内供の鼻の話にベルクソンの〈笑い〉の分析を介在させる発想は、この点でも芥川にとってそれほど不自然ではなかったはずである。

このように、「鼻」執筆過程で既に読了していたベルクソンの『笑い』の諸指摘を流用していた形跡は、「鼻」の各場面に少なからず点在しているのである。

3

「鼻」執筆過程で『笑い』を介在させたとするならば、『笑い』には芥川の創作意図を探る上でさらに検討を要する諸指摘を見出すことができる。

ベルクソンは〈笑い〉の機能について社会的矯正作用を再三繰り返して強調している。その代表的箇所をあげると、やや長くなるが次のようである。

性格なり精神なりないしは肉体なりのこわばりはすべて社会の懸念の種になる。(中略)要するに「中心はずれ」eccentricie しているかもしれないからである。しかもそれにも拘らず社会はそのために具体的な損害を受けているのではないから、この際、具体的な取り締まりによって干渉するわけにはいかない。社会は自分に不安を感じさせる或る物に直面してはいるが、しかしそれもただ微候としてだけのこと——殆ど一つの脅威ともいえぬもの、せいぜい一つの身振りである。だからして社会がそれに呼応するにも、一つの身振りをもつてするのだ。笑いはこの種の或る物、一種の社会的身振りであるに違いない。その吹き込む懸念によって、笑いは「中心はずれ」を矯め抑える。

(第一章——)

〈笑い〉は、社会の調和を破る特定の人間の何らかの〈こわばり〉を矯正するための社会的身振りとして分析されている。

いわば〈笑い〉は、ある集団が社会的安定度を高めるために個人の突出した部分(肉体的・精神的・性格的)に対して無意識に発動してしまう矯正機能だというのである。

ところで「鼻」の冒頭を確認すると、次のようであった。

禪智内供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない。(傍点、筆者。)

この誇張的な否定表現は、「池の尾」という共同体がいかに内供の鼻(の噂話)を巡って密着していたかを示している。田中実氏も「同じ反応(噂)をする同質性、均質性を要求する共同体が前提となって成立していた」としている。「池の尾」という一つの共同体の中で、内供の長い鼻の話題は町の住人によって様々に噂されることが作品の前提であった。しかしその一方で、「五十歳を越えた内供」は「僧侶講説など屢行はれる」ような繁栄を誇る寺で「内道場供奉の職」に就く僧侶である。寺社が地域の中心的存在であった当時、「沙弥」の時代から高德の僧侶に昇進するまでの長年にわたる内供の鼻の噂話には、単なる話題提供というレベルに止まることなく、町の者に共同的安定度を与える社会的意味をも重ねてみることができると池の尾の町の高徳の僧侶の滑稽な側面を噂することで、逆に彼ら同士の間での世俗的人間関係の安定が保持されてきたとしたら、内供の長い鼻は、内供の意に反して池の尾の町者に、ユーモアと共存意識を与えるシンボルとして共有され、池の尾という社会における集約的役割を潜在的に担っていたと言え

る。実際、語り手は作品全体を通して地域性を表す「池の尾」という語にこだわり、その範疇での内供と他者とのドラマを展開させている。それは、芥川自身、ベルクソンによって喚起された〈笑い〉の社会的意味に意識的だったためではなかったか。

それだけに、内供が鼻を短くしたことは、池の尾の町者にとつて関心の有無に関わらず、見逃せない新たな相貌として不調和を示唆してしまう。長年の話題提供者としての内供の鼻が収縮すれば、池の尾はベルクソンのいう「中心はずれ」が生じるわけで、池の尾の者の〈笑い〉には社会的矯正作用が必ずから発動されていたと見ることができるのである。しかも、そこには〈笑い〉の性質上、ベルクソンの指摘する「底意」、「鼻」における「傍観者の利己主義」が存在するわけであるから、内供にとつては嘲笑としての〈晒い〉に相当してしまう。

草稿を推敲していく過程で、芥川が〈笑い〉と〈晒い〉との差異を内供が鼻を短くした直後から意図的に使い分けようとした理由は、このようにベルクソンの指摘した「中心はずれ」とそれに対する社会的矯正作用を作品内に布置しようとしたためだと思われる。

そもそも自尊心の毀損回復を目的として内供が鼻を短くしようとしていたことについては、周知のように、芥川自身、「鼻」自解(芥川未発表メモ)の中で次のように綴っていた。

僕は鼻で身体的欠陥のためにたえず vanity になやまされ
てゐる苦しさを書かうとした(中略) 実際に身体的欠陥の
ある人は幾分でも内供の心持ちに同感してくれるだらうと

思ふ。

友人宛書簡の下書きと推定されているこのメモにおいて、「鼻」執筆動機の一つに「たえず vanity になやまされてある苦しさを書かうとした」点を見いだすことができるのは興味深い。内供が自尊心回復を企図したのは、そこに vanity (虚栄心) が働いていたからに他ならない。しかし、個人が虚栄心を抱くとき、それは他者から見ればベルクソンのいう(精神的な)「こわばり」に過ぎない。いわば、特定人物が虚栄心に固執することとは、他者で構成されている共同体の単位にとって調和を乱す者として映ってしまう。

ベルクソンは『笑い』の結末で、実は虚栄心についても周到に言及している。ベルクソンは虚栄心を「社会生活の自然的所産」であるとしつつ、「ただ反省によつてのみ」解消出来るとしている。そして、顕著な社会的欠点を「虚栄心 *vanité* である」と断言し、次のように指摘する。

人は笑いが規則正しくその主要役目の一つ、すなわち放心しているうぬぼれを完全な自意識の境に引き戻し、かくして性格のできるだけ最大の社交性を獲得させるといふ役目を果たすのをそこに見るであろう。(中略)笑いは絶えずこの種の仕事を成就している。その意味において虚栄心の特効薬は笑いであり、そして本質的に笑うべき欠点は虚栄心であるといえるだろう。(第三章一一)

内供は鼻を短くすることで「満足そうに眼をしばた」くのであるが、作品冒頭の動機を参照すれば、その「満足」は肉体的不満からの解放を意味するのではなく、自尊心毀損の回復願望を意図する虚栄心の充足を意味していた。語り手は鼻の短くなった内供の和みを「幾年にもなく、法華經書写の功を積んだ時のやうな、のびのびとした気分になつた」と彼の心情に沿つて表明している。しかしそれとは裏腹に、池の尾という共同体的視点から見ると、内供の自尊心毀損の回復はなによりも虚栄心拡張のシグナルともなつてしまふのである。その意味で、作品後半の場面に短い鼻に対する池の尾の笑いを対置させるという、『今昔物語集』にはみられなかつた芥川のオリジナルな設定が付与されるのは、ここでもベルクソンの指摘する「虚栄心の特効薬は笑い」だというテーゼが生かされたからではなかつたか。ちなみに、草稿を見ると、内供の鼻が短くなった場面以降で再三にわたる書き換えを行っている。鼻の短くなった場面以降に、ここまで比較考察してきたような〈笑い〉の機能を介在させながら作品を完成させる作業に芥川は苦心していたことが推測されるのである。

4

このようにベルクソンの『笑い』を通して「鼻」を検討するとき、内供の鼻が結果的に元に戻る結末に向けての場面設定には、極めて重要な意味が付帯してくる。

従来、再び鼻の長くなった内供については、長い鼻に悩んで

いた以前の内供との客観的な状態比較から内供を相対化して論じる傾向にあった。「明らかに錯覚である。明日からはまた笑われる」という三好行雄氏の指摘に始まり、宮坂覺氏の「内供にとつて異形なものは、鼻ではなく、実は心の裡にあった。それに内供は気づいた」という内面分析、海老井英次氏の「状態は旧に復したものの、深い喪失感を伴うものに変わってしまつたのであり、内供の悲喜劇は終わっていない」という新たな「自我」喪失のドラマを見る論などがそれである。しかしそのような読みは、内供の心的状況（心理や心情とは違ふ）に立ち入っていない。内供の心的状況を作品の前後で等質的なものと前提し、その比較検討から分析的に内供の人物像を捉えている。これらの論議の中で、再び鼻が長くなる内供の、その瞬間の心的状況をあくまでも唯一無二な質的把握として読むことが従来は看過されてきたのではないか。

芥川は、「新思潮」創刊の為に「鼻」を再執筆しはじめた時期、大正四年二月三日付書簡で、次のような文面を井川恭宛に送っている。

外面的事象の内面化だ その上でそれにある統一を作つて
個々の事実を或纏つた有機的なものにむすびつける

その統一を何によつてつくるかがさし当りの問題だが

ここには、外的事象と内面との有機的統一に意識的であつた芥川の姿がうかがわれる。そして「鼻」の結末は、確かに諸条件の有機的統一の下に描出されたとと言える。既に平岡敏夫氏が

はじめ諸氏によつて作品結末に描かれる唯一の風景描写の存在が重視されているように、作品の結末は内供を取り巻く外界の状況抜きには把握できない。『今昔物語集』においては短くした鼻が二、三日中にすぐに元に戻つてしまうという設定であつたのを、わざわざ「或夜」から「翌朝」にかけての自然描写に連動させてあたかも奇跡が生じたかのように描出する結末は、芥川の独自性をもつとも發揮された箇所と言えるであろう。

結末の場面に内供の心理を翻弄する他者が不在なのは偶然ではない。「羅生門」(大4・11「帝国文学」)の前半の場面と同様に他者不在(「自意識不要」)の中で、予兆的な前夜と象徴的な翌朝の自然現象が内供の肉体的変化と不可分に作用し、奇蹟とさえ受け取れる唯一無二の美的瞬間の到来が内供を「はればれとした心もち」に導いている。黄金に輝く庭、まばゆく光る九輪など、ここには美的瞬間を彩る舞台が用意されており、そのような瞬間に身を置いているからこそ、一夜にして短くなつた鼻に、彼は何の疑いもなく「はればれとした心もち」が「どこからともなく帰つて来る」と感じられるのである。この「どこからともなく」という表現は、内供の自意識や心理ではなく外界と照応した心的状況を表すものとして、緊密でかつ至福な瞬間の到来に包まれている状況を描出しているといえる。そしてこの瞬間は、長年悩んできた内供にとつて恐らくかけがえのない内的時間であり、それまでの弛緩した時間経過とは質的に全く異なるのである。したがって、内供の心理や自我意識といった客観的分析という尺度で「鼻」の結末をはかるだけでは不十分なはずである。語り手が内供の内面に寄り添うように

語っているのも、その場のその状況に身を置いてみない限り内供のはればれとした美的瞬間が体现できないためであり、その唯一無二の心的状況を芥川は有機的統一として創出するのに一応の手応えを得た、と言うべきなのではないか。

ちなみに、この結末描写は、『笑』の中で展開される芸術論の次の箇所を表現していると言える。

詩人がうたうものは、彼自身のもの、そしてただひたすら彼自身のものであつて、そしてやはり決して二度と帰つて来ないひとつの精神状態である。劇作家が我々の目の前に見せてくれるものは、一箇の精神の絵巻物であり、感情と事件との生きた織物であり、つまり一度現れて決してもう二度と反復されることのない或るものである。我々はこれらの感情に一般的な名称を与えてもその甲斐はなからう。ほかの精神においては、それらはもはや同一物ではなくなるであらう。それらは個性化されている。そこからしてとりわけ、それらは芸術に属するのである。(第三章——)

このベルクソンの芸術論は、さらに『時間と自由意志』の思想的核とも言える〈持続〉の原理に通底してくる。ベルクソンは、物理的時間概念が我々に等質的空間意識を生じさせ日常体験を習慣的な連続した均質的展開であると思ひこませるのであるが、実際には常に瞬間瞬間が唯一無二のものとして区別され、それぞれが質的に重複しないものとして内的に持続していることを指摘する。そしてそのうちの〈緊張〉した〈持続〉だけが

一つのまとまった出来事として把握され、しかも各人各様の諸瞬間が全て質的に異なるゆえ、それら瞬間の心的状態がわれわれの実存を意味あるものにしていくとする。「私の内部では、意識の諸事象の有機化や相互浸透の過程がすすみ、それが真の持続をつくる。」と述べるベルクソンの議論の対象は、あくまでもこの「私」の意識の持続の問題であり、人間一般の統計的、計量的な客観的観察分析とは異なっている。

とすれば、先に述べたように、「鼻」執筆直後に『時間と自由意志』を読了する芥川は、「僭越だが序文と結論とをこの本を読まない常からボンヤリ僕も考へていた」と記していたように、〈持続〉に通じる芥川自身の直感的美的感性とでもいふべき観点を、既に「鼻」の結末にも反映させていたと思われるのである。

ここで興味深いのは、「鼻」を激賞した夏目漱石も『時間と自由意志』を明治四四年六月下旬から七月にかけて読み、審美的観点からその感動を次のように銘記していたことである。

文学書ノ面白イモノヲ読ンデ美シイ感ジノスルノハ珍シク
ナイガ哲理科学ノ書ヲ読ンデ美シイト思フノハ殆ンドナイ。
此書ハ此殆ドナイモノ、ウチノ一ツデアル。第二篇ノ
時間空間論ヲ読ンダ時余ハ真ニ美シイ論文ダト思ツタ。

このようなベルクソン哲学に共鳴する漱石の審美的観点は、「鼻」の評価に少なからず関与していたのではなかったか。

ちなみに、既に赤羽学氏が指摘しているように、「鼻」が漱

石の「吾輩は猫である」の登場人物鼻にまつわるエピソードを連想させるのは容易である。漱石と「鼻」との関連については別稿に譲るが、第四次「新思潮」創刊において漱石を第一の読者に想定していた経緯も考慮すれば、「鼻」を読んだ漱石が「吾輩は猫である」を連想し、芥川の手腕に関心を深めたことは想像に難くない。そういった中で、漱石と通底するような美的感性によって仕上げられた「鼻」に対し、審美的観点から「上品な趣」を見出す漱石の評価は自然の流れであつたとも言えるのである。

5

最後に、「鼻」の結末を先の〈笑い〉の特質によって再び照射してみれば、「中心はずれ」であつた内供の短い鼻が自然にもとに戻ること、社会的懸念は解除され池の尾の社会的調和は復活することとなる。〈笑い〉の機能が自然作用と結びつくことで、虚栄心にこだわる内供と町の噂に集団的安定を無意識に願う池の尾の者との直接的な衝突は回避され、両者の対立は緩和されている。結末における前夜から翌朝にかけての自然作用は、内供の心的状況に美的瞬間をもたらすと同時に、池の尾の社会的安定も回復するという二重の意味を含んでいることとなる。

ここで問題となるのは、個人の感情と社会との相関において、社会的安定度を前提とした調和を優先させる指向性であろう。しかし、ベルクソンは、その点についても『笑い』の中で、「も

し人間がその感性的自然の衝動のままに任せていたとしたら（中略）激しい感情の爆発は日常茶飯のこととなる」とし、「次第次第に平穏化される社会生活へ向つての人類の緩慢な進歩」を「善」として、笑いの考察の結論を次のように述べている。

社会はそれ（善）筆者注）が完全の域に進むにつれてますます大いなる適応のしなやかさをその成員から要求しているということ、それは根柢においてますますまい具合に平衡化しようとするに過ぎないこと、それはますますその表面からかような大集団には附き物のさまざまな混乱を掃除すること、そして笑いはそれらの波立ちの形態を強調することによって有用な役目を果たしているということであつた。（第三章―五）

芥川がこの点を踏まえていたならば、「鼻」は、個人の伸張と社会との相関にベルクソンの〈笑い〉の機能を配置して、虚栄心を抱く個人の内的安定と無意識的矯正作用による共同体的調和を同時に成立させる方法を意識しつつ、最終的には自然作用に託して審美的に描いてみせた作品だと言えるであろう。両者の醜悪な部分のあからさまな対立や衝突を〈笑い〉と自然作用が緩和するという構図には、「芋粥」（大5・9「新小説」）にも通ずる優情や美意識が優先されている。

但しここには、鼻の噂を払拭するための社会的既成事態への打開や内供と他者との関係性における根本的な和解などが問われていない点で、その不徹底な態度に「それでは〈私〉の〈自

閉〕からなら脱出していない⁽²⁾』という田中衷氏の批判が提示されるのも当然と思われる。繰り返すが、ベルクソン哲学の支柱はあくまでもこの「私」の意識を中心に据えた議論であり、同時にそういった個々の「私」が構成する社会全体の進歩を標榜する考察でもあった。作品の構造的把握に「鼻」がどこまで耐えうるかは友田悦生氏が既に卓論を展開しており、「鼻」のアレゴリーは、内供と池の尾の僧俗とを、互いに恐るべき他者として直面させるのではなく、むしろ対立を演ずる共演者の關係に還元する機能である⁽³⁾』と述べるが、そのアレゴリーを支える高次の意味体系が、ここではベルクソン哲学であったと言えよう。ちなみに友田氏は、芥川に意味体系の普遍性の崩壊を見出しているが、恐らくその点が晩年の「園車」に描かれる「僕」の心境にまで引きずられていく作者の課題であつて、ベルクソン哲学を視座に芥川文学全般を問い直す契機はその点とも関わってくる問題なのである。なお、本稿の考察結果からは、従来から指摘されている芥川自身の失恋体験との相関に遡行することも不可能ではない。自我拡張が養家の旧弊な封建的雰囲気に妥協せざるを得なかった実体験的経緯を、ベルクソンの〈笑い〉の理論に一時的に投影させて自らを滑稽な存在として相対化し、自身の存在のある種の断念と合理化を内包させながらも危機を退避しようとした個人的問題に帰着させる見方である。しかし、自己と他者の關係性の問題に力点を置く観点だけが芥川文学を考察する唯一のパロメータではないはずである。この「私」の意識の状況と自然現象を含めた外界との有機的連関の現象を実存的に捉え、その審美的瞬間やそれに纏わる記憶の蘇

生などを作品世界の中心に据えるという、いわば表現方法としての象徴主義的な創作意識の萌芽を「鼻」に見ることも可能なのではないだろうか。それは確かに、友田氏の指摘する「超越論的自己」を欠いたシンボリズムであるが、そういった表現の問題を「鼻」以降の作品について考察していく課題は未だに残されている。世紀末芸術やベルクソン哲学に共鳴した芥川の創作意識と方法の再検討の発端を「鼻」は示唆している。

『今昔物語集』の中から滑稽人物ともいえる内供を登場させ、ベルクソンの〈笑い〉の機能を介在させつつ個人と他者との關係性を調和的に展開させた「鼻」は、あたかも非人爲的な力の介在によつて鼻がもとに戻るよう設定を施したことも含めて、一種の特異さを備えた作品として漱石の前に提示されたことは間違いない。

芥川の表現を中心とした芸術的出発はここに始まったのである。

〔注〕

- (1) 「芥川龍之介の小説「鼻」——「噺」〈笑い〉に焦点をあてて——」(平5.6「早稲田大学 国語教育研究」)及び「芥川龍之介資料集」を読んで(平8.4「国文学」)
- (2) 拙稿「鼻」調和への志向」(平成11.11「国文学 解釈と鑑賞」)
- (3) 平成七年版「芥川龍之介全集」第十七巻(岩波書店、平9.3)では「年次推定」と記載されているが、「後記」にも付されているように、昭和五十一年版全集で「天正四年」とした誤りを内容的に吟味して配列の訂正をしている。

(4) 松岡謙は末文の「お断り」で、「この譯は二年前前の舊稿でもある」と記述しており、ベルクソンの『笑い』の英訳書は少なくとも明治四十五(大正一)年には第三次「新思潮」同人の中で取り上げられてい

たことがわかる。

- (5) 石割透氏も「芥川龍之介の小説『鼻』——『噂』『笑い』」に焦点をあてて——(平5・6「早稲田大学 国語教育研究」において、同書を例示している。
- (6) この点については、鈴木貞夫氏の『生命』で読む日本近代(平8・2、日本放送出版協会)及び同氏編『大正生命主義と現代』(平7・3、河出書房新社)に詳しい。
- (7) 芹澤光興氏は「鼻」(作品と資料 芥川龍之介 昭59・3、双文社出版)の中で「鼻が長かったときの内供を周囲が嘲笑したことの確たる描写はどこにも見当らず、弟子僧の『同情』という明白な作品要素を鑑みれば、これが内供の特徴たる過度な他者意識の所産——被害妄想であった可能性が出て来る。」と述べている。
- (8) 松沢和宏氏は「鏡の物語——『鼻』の草稿を読む——」(平8・1「文学」)の中で「鼻」の推敲過程は、内供の解釈による錯迷を浮き彫りにする方向でなされているのであり、周囲の笑いを晒しに解釈してしまいう内供の悲喜劇はまさに音としては聞き取れないこの同音異義の差異の上に構築されている」と指摘している。
- (9) 「笑い」の引用は、以後全て林達夫訳「笑い」(初版昭13・2、改版昭51・11、岩波文庫)による。
- (10) 「芥川龍之介資料集 図版1」(平5・11、山梨県立文学館)
- (11) 石割透氏は、前出「芥川龍之介の小説『鼻』——『噂』『笑い』」に焦点をあてて——において、先に挙げた「笑い」の英訳書における「the absence of feeling」(邦訳「無感動」)の箇所を「傍観者の利己主義」と対応させている。しかし、「the absence of feeling」は、笑いが笑われる当人の内部に立ち入らず、情緒に無関係に当人の外部を笑うという特質の説明に用いている箇所である。
- (12) 「芥川文学研究ノート③『鼻』と『龍』」(平6・3「都留文科大学研究紀要」)「日本文学研究大成 芥川龍之介II」(平7・9、国書刊行会)
- (13) 「負け犬——芋粥」の構造——「芥川龍之介論」昭51・9、筑摩書房)
- (14) 「Saitō 芥川龍之介『作家と作品』(有精堂、平2・4)
- (15) 「鼻」——「自尊心」の悲喜劇——「月刊国語教育」昭58・2↓「芥川龍之介論——自己覚醒から解体へ——」桜楓社、昭63・2)
- (16) 平岡敏夫氏は、「日本的な自然の風景」であるとし、「芥川が創つたそれ自体として自立した風景でありつつ、いま内供が発見しようとする『はればれとした心もち』に通うものである。」(「鼻」昭54・7「稿本近代文学」)↓「芥川龍之介 抒情の美学」大集館書店、昭57・11)と指摘している。また、小澤次郎氏の「芥川龍之介『鼻』に見る潜在的『他者性』の考察」(平7・9「論樹」)にも同様の指摘がある。
- (17) 拙稿「『羅生門』論——感性から論理へ——」(日本語と日本文学)平8・8↓「芥川龍之介 作品論集成第1巻」翰林書房、平12・3)において、前半の下の行動は、他者不在によって自意識不要の感情の赴くままに振る舞っていた事態を指摘した。下人がしかし老婆によって論理的営みを強要されたとすれば、「鼻」の内供はそこから後退しているとも言える。
- (18) 夏目漱石は明治四四年の日記において、六月二十八日に「昨日ベルグソンを読み出して『教』の篇に至つたら六つかしいが面白い、もつと読みたいが今日は講演の頭をと、のへる都合があつて見合せ。」七月一日に「ベルグソンの『時間』と『空間』の論をよむ」と書き記している。また、引用した漱石の書き込みは、日記の記述に対応する「Time and Free Will」(一九一〇、東北大学附属図書館漱石文庫所蔵)の前扉に見られ、さらに154ページには「余ハ常にシカ考ヘ居タリ、ケレドモ斯ウシステムヲ立テ、遠イ処カラ出立シ此処ヘ落チテ来ヤウトハ思ハザリシ」という書き込みがある。
- (19) 「芥川龍之介の『鼻』における治療の問題」(平4・5「文芸研究」) 拙稿「芥川における漱石継承への一視点——『鼻』による『余歌取り』の手法から——」(平13・1「香川大学国文研究」)
- (21) (12)に同じ。
- (22) 「鼻」のアレゴリー——超越論的主観の出自とゆくえ——(平6・10「日本近代文学」)↓「初期芥川龍之介論」翰林書房、平6・11)

(たかはし たつお 香川大学教育学部)